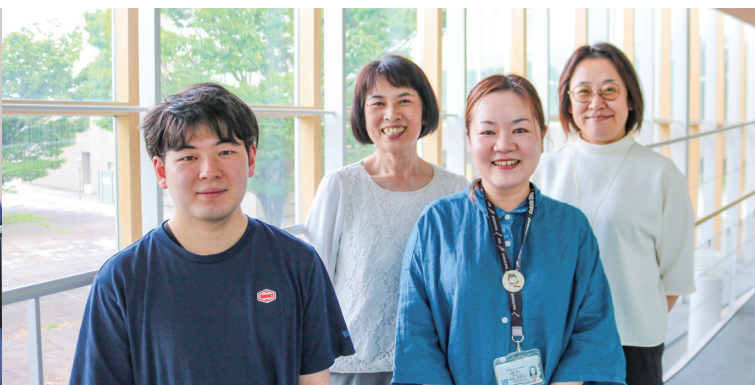




◆在学生の声

白 畑 さん 修士課程2年・元自治体職員

研究テーマ：スクールソーシャルワーカー・スクールカウンセラーの連携

佐 藤 さん 修士課程1年・自治体職員

研究テーマ：若者の生きづらさ

相 馬 さん 修士課程1年・公益学部卒業生

研究テーマ：生活保護受給世帯の児童の自立支援

教授 武 田 真理子 [社会政策・公益学]

ゼミ(演習)・研究の様子

武田：ゼミは1週間に1回のペースを基本としています。院生自身のペースで蓄積していくことも重要なのであって間隔を開けることもあります。一方で研究には休みはないので、夏休み・春休み期間も院生にあわせてサポートしています。

佐藤：ゼミでは、事前に先行研究を読んでまとめます。自分がどのような視点で捉えたか、議論したい視点などを含めてみなさんに報告します。私はSSW教育課程の受講生ではありませんが「子どもの福祉」としては共通していますので、他の院生と一緒にゼミをおこなうことで、得られる内容がとても充実しています。

相馬：ゼミでの報告は緊張しますね。毎回武田先生の満足するラインに達しているかが気がかりです（苦笑）。武田先生からは、自分の気づきをアウトプットできるような質問を投げかけられます。

武田：プレッシャーをかけているのでしょうか（苦笑）。私は、院生のみなさんの研究を伴走することを意識しています。私自身が知らないことを院生が調べ、考えています。気づいているのに言葉で表現できていないことや、自信がない・自認しきれないことだけど問題として捉えていることを、ゼミの場では安心して話していただきたいので、遠慮なく質問しています。院生と教員は研究者として対等だと思っています。「子どもの福祉」がゼミ生に共通する研究テーマでも、各々の立場や経験してきたことは異なります。私は実務の経験がないため、院生に気づかせてもらうこともあります。

白畑：私は自治体職員として福祉の業務を担当していました。大学院入学後、文献を複数読んで、そこに共通することを研究テーマに沿って整理していくと、ようやく私が何を明らかにしたいのかが分かってきました。視野が広がったことはもちろん、実務と研究をオーバーラップさせることもできました。「現場」と「研究」の接点がゼミですね。行政組織としての「建前と本音」がある中で働いてきたのですが、研究を通して、社会的に求められる、必要とされることなのかどうかを振り返ることができています。研究を通して得たことは、今後現場に返したいと考えています。

佐藤：本当にそうですね。現場では、調べる余裕もなく、対症療法のようになっていることがあるのが実態です。「なぜ？」と思ったり「肌感覚」でおこなってきたことを学問を通して明らかにし、対応できるようにしたいです。

SSW教育課程の魅力

相馬：私は社会福祉士の資格を目指し公益大に入学しました。社会福祉士といってもいくつかの分野があって、学部2年次にスクールソーシャルワーカーの存在を知り、修士課程に進学して専門的に学ぶことを決めました。公益学部から進学する学生には学費減免の制度があり、これはおすすめできるポイントのひとつです。

武田：SSW教育課程を修了した方が、山形県内で活躍しています。先日はその3人にゼミにお越しいただき現場からの知見を共有していただきました。社会科学の研究対象は「人」と「社会」で、常に変化するものですから、現場のお話は院生のみなさんの研究にも影響しますね。

白畑：今まで積み重ねられてきたことが進化・深化して前進していることが感じられました。この教育課程は、庄内地域・山形県に確実に還元できる、存在意義が大きいと思います。このようなゼミの形式の他にも、先進事例の視察や実習など充実したカリキュラムがあることは魅力的ですね。

入学検討者へのメッセージ

相馬：専門的な知識を身に付けることを目的として大学院に入学しましたが、大学院で多様な人と関わることができました。このことは、自分の疑問を突き詰めて行く中で非常に価値のあることだと感じています。自分と社会を照らし合わせつつ繋がっていくことができる大学院は、学部生にとっても選択肢のひとつになるはずです。

佐藤：自分の学びが、自己完結ではなく地域に還元されるということが、公益大大学院の強みだと思います！

白畑：大学院では、自分が分からないことを「公益」を切り口に明確にし、学問として裏付けることができます。なんとなく「これでいいかな」と思っていることを、学問を通して捉え直す・学びなおすことができます。年齢は問わず、やりたいと思った時がみなさん自身のタイミングです。何歳からでも挑戦できますよ。

武田：この教育課程を通して、ソーシャルアクション・地域への働きかけが起きます。大学院はひとつの「コミュニティ」です。問題意識をお持ちで、それを深めて考えたい・広げて考えたいという方に適しています。特に公益大大学院は、院生・教員・地域のみなさんとの相互作用により、学修・研究が展開できるオープンな大学院だと思います。ぜひ一緒に研究しませんか。

在学生の声 ゼミ紹介



加藤 さん 修士課程1年・自治体職員

教授 小野 英一 [人事行政]

入学のきっかけ・研究テーマ設定

加藤：私は、自治体職員として働いており、派遣研修という形で在学しています。大学院に入学したのは、働き始めて8年目の時です。市職員としての知識は身につけてきたと思う反面、「市職員の視点」だけを養っているのは、物事を客観視できなくなることを危惧していました。プライベートでも、リスキングに興味があって色々探していたところでしたので、丁度よいタイミングで入学できたと思っています。

テーマは「自治体の採用試験」です。研究テーマ検討に際して小野先生に紹介いただいた人事行政の本を読んだときに、人事のルールが学問として詳細に分析されていて「これも学問なのか！」と感銘を受けました。私が漠然と考えていたことが言語化・理論が確立されていることが多くて、腑に落ちるとともに、新鮮さと驚きを感じました。また、自分が受験した頃から自治体の採用試験の内容が大きく変わりつつあることを知り、内容・課題・その解決策を探りたいと強く思いました。

ゼミ(演習)の様子

加藤：ゼミの1年目では、論文・文献を読む先行研究レビューが中心です。内容を要約し、印象や疑問をまとめて先生に報告します。授業の中でアドバイスをいただき、次にどの文献を読むかを決めます。これを繰り返していきます。

小野：アドバイスといっても、意欲的・自主的に取り組んでいることが伝わってきていますので、プッシュするような形ではなく、加藤さんのその気持ちが維持されながら進んでいくようにサポートすることを意識しています。それから、研究の知識・経験が業務に活かされる、業務や行政現場で得た知識・経験・問題意識を研究に活かすという、「業務と研究が活かされ合うこと」を意識してもらいたいと考えています。

入学してから変わったこと

加藤：入学してからは考え方・行動が変わりました。

1つ目は、以前は斜め読みだった公務員用のニュースサイトを、学術的な知見・フィルターを通して読む意識ができました。

2つ目は、多様な意見があること、他者へのアンテナを高く張ることです。「詳しい人・専門家の話が正しい」と思っていたのですが、大学院の授業はディスカッションが多く、全く違う背景から見たときには考え方が180°変わるということを体験しました。考えをすり合わせることも大切ですね。3つ目に、批判を受けることを恐れてあまり意見を言うことができない性格だったのですが、自分の考えを論理的な整合性をもって説明することを繰り返しているうちに、どうすれば他の人に納得してもらえるかが分かってきたため、建設的な議論が楽しいと思うようになりました。

入学前には想像していなかった変化がありましたね。仕事をする上での柱ができて、本当に良かったなと思っています。

院生生活

加藤：仕事をしながら通学しています。現在が入学から2学期目で、週に3科目の授業があります。授業時間分は業務時間を減らすこととなっていて、週に1日は研究に充てて良いという制度もあります。おかげで身体と心の余裕をもって、仕事と研究ができていますと感じています。

小野：仕事と研究の両立は大変重要ですね。どちらかが息詰まってはダメですね。私も働きながら大学院に通学したため、その大変さは実感しています。勤務先の理解は重要ですね。

加藤：そうですね。2年目は論文執筆に向けて大学院にかかる時間が増えると思うので、制度を活用していきたいです。

課題などは自宅ですることが多いですが、必要な情報は図書館だけではなくWebを通して得られますので、場所を問わず学修できます。大学院に行ったときには、同期とは雑談も議論もします。違う視点の話を聞くことができるので大変おもしろいです。

入学検討者へのメッセージ

小野：仕事と研究の両立は簡単ではありません。進学によって、本業もプライベートも一時的にマイナスになることもあるかもしれません。でもそれは一時的であって、長期的に見ればそのマイナス分を優に超えるプラスが得られる可能性があります。大学院には、仕事をとおしては見えないものや得られない経験が多くあります。知識・人的ネットワーク・スキルは当然ですが、そもそもが違う新しい世界が待ち受けています。迷ったら、ぜひ飛び込んでもらいたいです。

安孫子 さん 修士課程1年・公益学部卒業生

北條 さん 修士課程1年・公益学部卒業生

准教授 樋口 恵佳 [国際法・国際海洋法]

公益学部から公益大修士課程へ進学

北條：学部4年生の時、ゼミ担当の樋口先生から修士課程進学への選択肢があることを教えてもらいました。卒業論文を執筆しながらもっと深く知りたい・研究したいという思いが強くなり、大学院オープンキャンパスへの参加や樋口先生から背中を押してもらったことで、大学院進学を決めました。学部で指導していただいた樋口先生に引き続き指導していただけることはありがたいです。それに加えて、学内進学の費用が非常に安いことと、社会人学生が多くいることは魅力でした。学部時代のほとんどがコロナ禍だったので、多様な人と接することができる場を求めています。

安孫子：卒業論文で十分に研究しきれない、と思う公益学部生に、公益大大学院はおすすめですね。私も北條さんと同じように、知っている先生方に引き続き科目やゼミを担当していただけることと、学内進学者の学費減免が充実していることから進学を決めました。私の場合は、学部ゼミに大学院進学した先輩が複数いて、早いうちから大学院の情報を得ることができていたので、学部3年次の初夏には自分が研究する姿を想像していました。

ゼミ(演習)・研究の様子

北條：私の研究テーマは「サイバー攻撃に関する国際法」です。今はオンラインで指導していただいています。最近のゼミでは、研究テーマに関する議論を把握するため、先行研究をまとめてレジュメを作成し、その内容を報告しています。

樋口：そのレジュメを元に私から北條さんへ毎回質問をしますが、北條さんはうまく答えられることが多く、きちんと読んでできていることが伝わります。

北條：ゼミの直前は不安ですが、始まってみればあっという間ですね。実は、レジュメの他に想定問答も準備していて、答えられたときには達成感があります。もちろん、まだまだ分からないことも多く、答えに辿り着くまでは樋口先生にヒントをいただき、自分自身が納得するまでじっくり考えられるようにフォローしていただいています。オンラインでの指導は、同じ資料の特定の箇所と一緒に確認することができるので、スムーズに進みます。

樋口：北條さんは大変複雑なことに取り組んでいると思いますし、指導している私もアドレナリンが出ます(笑)。そのくらいやりがいがありますね。



まだ運用が固まっていない分野の研究なので、北條さん自身の考察が非常に重要になります。それを今後、分析・検証してもらえればと思います。

安孫子：私は「核軍縮と人道的アプローチ」をテーマに研究しています。学部卒業論文のテーマも核軍縮でしたが、違う視点での研究を目指しています。核兵器は、主要国だけでは議論しにくいテーマです。自分の研究が国際社会づくりに貢献できるレベルまで深められるといいなと思っています。

樋口：入学後すぐの今の時期は、核兵器禁止条約のコメンタリー（専門家の解説）を読みながら、「人道的アプローチ」という言葉の定義や用法—どのような人が、どのような使い方をしているのかを確認しています。まずは安孫子さん自身が核兵器禁止条約の専門家になるところからスタートしてもらっています。

安孫子：コメンタリーは英語で書かれているため、自分自身で訳しきれなかったところを、先生に解説いただき、内容として理解できない部分はその場で一緒に調べるなど、丁寧に寄り添った指導をいただいています。学部時代より理解が深まっていることを実感しています。

樋口：他の科目の課題もある中で、良いペースで読み進めていると思います。まとめかたも上手ですね。

安孫子：連続して何時間も課題に取り組むことはなくて、授業の合間の90分にやるなど、あえて短時間で集中して取り組んでいます。それから、1人よりも誰かの目があるところのほうがいいですね。共同研究室に他の院生がいて、集中している姿を見ると、私もスイッチが入ります。ローカルな地域にいても最新の情報や十分な量の論文を読むことができますので、良い環境で研究ができていると思います。

院生・入学検討者へのメッセージ

樋口：現在指導している2人には、大学院という学び・研究の場を選択してくれてありがとう、と思っています。研究は孤独と葛藤との闘いです。計画通りに進まないこともあります。悩むことは真摯に取り組んでいる証拠です。自分自身に向き合いながら研究をするという、尊い時間を満喫してもらいたいです。

石川さん 修士課程1年

鶴岡市出身・県外企業で約30年間エンジニアとして勤務

教授 門松秀樹〔政治史・政治学〕

大学院入学のきっかけ、公益大大学院を選んだ理由

石川：旅行が趣味で、以前から観光について学びたいと思っていました。観光について考えていく中で、自分の中に観光を通じて地域を活性化させたいという思いがあることに気づきました。

学べる大学を探していたところ、私のふるさと鶴岡市に公益大大学院があり、日本で唯一、「地域共創」や「公益学」を学べることを知り、すぐにオープンキャンパスに参加しました。その後、現在指導をいただいている門松先生との入学前面談とおして、入学する意思を固めました。

ゼミ(演習)・研究の様子

石川：研究テーマは、城跡を活用した観光施策です。

門松：まずは城跡の観光資源化の観点から、現存天守や模擬天守など、城跡にどのようなタイプがあるのかを調べてもらいました。また、観光収益と維持コストが地域に与える影響を算るためにデータを集めてもらっています。

石川：私は旅行の他に、お城や城下町を散策することも好きなので、今まで見てきたお城の知識を研究に活かすことができている。前職はエンジニアだったので、その知識はデータ分析等に活用できています。門松先生と話す

ことで研究がより深まっていき、とても充実しています。先行研究がほとんどない分野なので、収益性をどう論文化できるか探っている日々です。

院生生活

石川：研究を進めることに加えて、他の科目の課題レポートにも追われています。社会人になってから、仕事で本や論文を読んでまとめるということはありませんでした。読み進めたときに、社会人だからこそ気にかかることもあり、時間がかかりますね。入学から2ヶ月経ってようやく慣れてきました。学部を卒業したばかりの学生からも刺激を受け、なんとか頑張っています。

今後の展望

石川：自治体に政策提言できるレベルの修士論文が執筆できたらいいなと考えています。研究を通して山形県・庄内地域を全国にPRしたいですね。ただ、修士論文の執筆・修士号取得はゴールではありません。大学院での学修をとおして、自分自身を高めていきたいです。

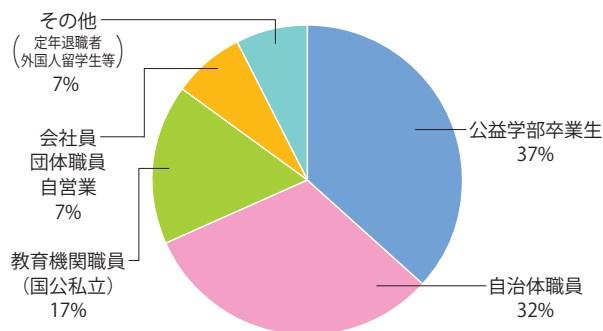
入学検討者へのメッセージ

石川：以前からずっと学びたいという意欲はあり、その機会を探していました。そして公益大大学院を知り、私にとっては大きなチャレンジでしたが、入学を決意することにしました。今、学びの場に身を置いて、見える世界が広がりましたし、充実した日々を送ることができています。みなさんも「興味・関心への想い」はあきらめずに持ち続け、その機会が来たときには、ぜひチャレンジしてほしいです。

門松：初めて本格的に学問に触れる学部とは違い、特定の分野・領域を専門的に研究するところが大学院です。解決したい問題があれば、徹底的に突き詰めることができます。公益大大学院で、社会問題とご自身にもっと深く向き合う機会を設けてみてはいかがでしょうか。

多様な学生が共に学び・研究しています

修士課程：2019年度から2024年度春学期までの入学者



公益大大学院での学び・学生生活は、ご自身のワークキャリアやライフキャリアにどのように役立っていますか？

- 論理的な思考(ロジック、モデル等)や、統計的分析の視点を業務に導入するようになった。
- 学問的な視点から客観的に根拠を持って物事を捉える考え方が身に付き、仕事にとても役立っています。
- 研究成果が認められ、希望する部署への異動が叶った。
- 講義で一緒に学んだ院生同士の繋がりは、修了後も続いており、業務上のちょっとした相談なども気軽にできています。